原 著

鍼灸学校卒業後の進路と実態調査(II)

(社)日本鍼灸師会・(社)全日本鍼灸学会に対する意識調査

藤 原 秀 雄*

I はじめに

鍼灸に対する社会的評価の高まる中で、毎年多くの鍼灸師が誕生し、診療に従事している。これら、卒業間もない鍼灸師が、(社)日本鍼灸師(以下日針会)・学術団体である(社)全日本鍼灸学会(以下学会)について、どれほどその活動を理解し、いかに自己の職業と密接に関連づけているのかは不明である。また、新しく鍼灸を職業として選択した彼らが、現在の鍼灸のあり方・今後鍼灸師が進むべき方向性についてどう考えているかは、まだ調査されていない。

今回、われわれは、日針会・学会に対して卒業間もない彼らが何を求めているか、又何を希望しているかを調査し、今後の日針会および学会活動の方向性を考える上での資料とするため、アンケート調査を行なったので若干の考察を加え報告する。

II 対象と方法

今回の調査は、昭和56年・57年・58年度の入手可能であった鍼灸学校卒業者名簿より、無作為に抽出した1,000名を対象とした。

アンケート用紙(表1)は、各自に郵送し回収した。

調査回収期間は、昭和58年10月より昭和59年4月までとした。

III 結 果

1) 回収状況：アンケート回答者の地域分布は、近畿地方を中心にほぼ全国的であった。アンケート郵送数1,000、回収288、回収率28.8%であった¹⁾。

表1 アンケート

-
- (1) 日本鍼灸師会・全日本鍼灸学会についてお答え下さい。
- 日本鍼灸師会
 - 会員・非会員について
 - 会員になっている。
 - 会員でない。
 - 全日本鍼灸学会
 - 会員・非会員について
 - 会員になっている。
 - 会員でない。
 - 学会について
 - 学会は、会員の利益のためになっている。
 - 学会は、無意味な存在である。
 - わからない。
 - 学会について
 - 学問的活動をもっとすべきである。
 - 学会員の利益の向上をもっと計るべきである。
 - 会員にわかり易い活動をしてほしい。
 - その他。
- (2) 日本鍼灸師会・全日本鍼灸学会について、御意見があればおきかせ下さい。
- 日本鍼灸師会について。
 - 全日本鍼灸学会について。
- (3) 現在の鍼灸師のあり方について、御意見があればおきかせ下さい。
-

2) 所属の有無：日針会所属の有無(図1・a)については、288名中266名が回答し、会員が52名(18%)・非会員214名(74%)と入会率が低かった。

学会所属の有無(図1・b)については、288名中256名が回答し、会員が25名(8.7%)・非会員231名(80%)とこれも入会率が低かった。

3) 学会についての意見および希望(図2 a・b)：学会に対しての意見では、学会は会員の利益にな

* Hideo FUZIWARA 岡山大学附属病院麻酔科

図1 所属の有無（会員・非会員）

図2 学会についての意見および希望

っていると答えたものが22.9%である反面、学会活動がわからないと答えたものが49%と非常に多かった。

学会に対しての希望としては、学問的活動をもっとするべきであると答えたものが23.3%と最も多く、このほか、会員にわかり易い活動をして欲しいと答えたもの17.7%，学会員の利益の向上をもっと計るべきであると答えたもの16%などがあった。

4) 日針会・学会についての意見（表2）：日針会に対しての意見・希望は、288名中84名が回答し、組織活動の充実および啓蒙不足を訴えるものが38件と最も多く、ついで、保険の運用に関する問題の早期解決を望むものが23件、保険問題の障害となっている団体の統一化を望むものが21件であったが、会費が高くメリットが少ないと答えたもの

表2 日鍼会・学会についての意見

(社)日本鍼灸師会についての意見。	(84名)
1. 組織活動の充実及びピーアール不足	(38件)
2. 保険問題の早期解決	(23件)
3. 団体の統一化	(21件)
4. 会費が高くメリットがない	(9件)
5. その他	(4件)
(社)全日本鍼灸学会についての意見	(36名)
1. 学会に対する理解不足	(10件)
2. 学術大会に対する意見及び期待	(10件)
3. 会員に対する学会の指導力の強化	(9件)
4. 保険問題の早期解決	(3件)
5. その他	(4件)

も9件あった。

学会に対しての意見・希望は、288名中36名と非常に少なかった。学会運営に関しては、学会活動に対する理解不足10件・会員に対する学会の指導力の強化を望むもの9件があった。学術に関しては、学術大会に対する意見および期待が10件あった。また、直接学会活動とは関係はないが保険問題の早期解決を望むものも3件あった。

5) 現在の鍼灸師のあり方（表3）：学問・教育に関する意見が56件で最も多く、西洋医学的知識・技能を身につけたいという希望が多かった反面、本来の東洋医学古典の知識・技能を修めるべきだ

表3 現在の鍼灸師のあり方について

A. 学問・教育に関する意見 (56件)
○東西医学の知識の向上
○卒後の学問の場が少ない
○学校教育のカリキュラムの充実
B. 鍼灸師の社会的地位に関する意見 (35件)
○現代医療体系の中での鍼灸師の身分の確立
○鍼灸独自の医療体系の確立
○鍼灸医学の啓蒙不足
C. 鍼灸学のあり方に関する意見 (32件)
○古典治療の充実
○医師と協力しての鍼灸治療
○信頼される鍼灸師へ
D. 保険問題 (27件)
○保険制度の全面的な早期運用
○団体の統一化

という意見もかなりあった。また、卒後研修の機会・学校教育における教育内容の充実を求める意見もみられた。

鍼灸師の社会的地位向上に関する意見は35件あり、現代医療体系の中における鍼灸師の身分の確立を求める意見・鍼灸独自の医療体系の確立を求める意見などがあった。また、社会・国民に対する鍼灸医学の啓蒙不足を指摘する意見もみられた。鍼灸医学のあり方に関する意見は32件あり、診療に対する自己の方向性として、古典治療の充実をあげるもの、地域の医療機関と連携を持った鍼灸治療院経営をしたいもの、患者と信頼関係のある鍼灸師を目指すものなどがあった。保険問題に関する意見は27件あり、団体の統一化を図ることにより保険制度の早期確立を期待する意見がある反面、反対する意見が一部にあった。

Ⅳ 考 察

全国に鍼灸師は約50,000名おり²⁾、両会への加入状況は、日針会に所属する者は約6,000名(12%)であり³⁾、学会に所属する者は約2,800名(5.6%)である⁴⁾。

今回の調査では、回収数288名中、日針会への入会者は52名(18.1%)、学会への入会者は25名(8.7%)であった。両会への加入状況は、少ないながらも増加の傾向にあると考えられる。

両会への加入の少ない原因としては、今回のアンケートから考えられることは、日針会については、「組織活動の啓蒙不足」「会費が高くメリットが少ない」、学会については、「学会は無意味な存在である」「わからない」という意見がみられるように、両会とも会員に対し、その組織活動の意義・目的などの啓蒙不足や指導性の弱さがあげられる。又両会に対する意見の少ないことから、両会の組織活動に対し、無関心な鍼灸師が非常に多いことが推察できる。これら組織活動に全く興味を示さない鍼灸師を、今後いかにして日針会・学会活動に参加させるかが、両会に科せられた今後の課題であり、かつ日針会会員・学会会員の任務ではないだろうか。

日針会は、鍼灸学術の進歩発展・国民の福祉・鍼灸師の資質の向上と福祉などを目的として活動

を行ない、会員のみならず鍼灸師全体の利益向上のため、その役割をはたしていかなければならないと考えられる⁵⁾。しかし、卒後間もない人々が日針会に希望している、組織活動の充実・保険問題の早期解決などは、会員の総力によってなされることである。これらの事を実現するためにも、卒後間もない人々が、積極的に会員となり、互いに協力し、組織力の強化を計って行かなければならないのではなからうか。また、日針会自体も鍼灸の専修学校・盲学校などの教育機関・その他の機関を通じ、日針会の目的・活動状況を今以上にアピールして行く必要があるのではないだろうか。

学会は、鍼灸医学に関する研究発表および知識交換の場であり、鍼灸医学の発展を目的とする学術団体である。しかし、学会への加入が少ないという事実や「学会活動に対する理解不足」という意見があることなどから、学会の活動および内容が十分に理解されていないことが考えられる。このことを打壊して行くためには、まず、学会が今以上に地方会の組織力を高め、組織活動の充実を計り指導して行く必要があるのではなからうか。

現在の鍼灸師のあり方については、個々の鍼灸師が改善し、かつ協力して行かなければならない点が指摘されている。卒後研修に関しては、現代医療の中での新しい鍼灸の方向性を模索している部分がうかがわれる。すなわち、病院勤務鍼灸師は、医師と協力し病院の中に鍼灸をとり入れ、また、鍼灸院勤務および開業鍼灸師は、古典鍼灸をもとにした診療の充実を図りつつ、周囲の医療機関と連携を保ちながら診療に従事しているものも少なくない。

このように、医師と協力しながら医療を進めて行くためには、東洋医学的知識だけでは十分でなく、西洋医学的知識・技能を積むことも大切なことである。しかし、このように東西医学に対する学習意欲がうかがわれる、卒後間もない鍼灸師たちの「学問の場が少ない」という意見から、日針会・学会等が今以上に教育指導をして行く必要があると考えられる。

鍼灸学校における教育については、鍼灸医学が医療の中に取り入れられ、社会的にも評価を受けてきた中で、医療状況に即応した体制の確立が求

められている。すなわち、全国の鍼灸師養成機関としては、専修学校・盲学校の専攻科・鍼灸大学などがあり⁶⁾、毎年約2,200名が卒業しているが、鍼灸を今以上に社会のニーズに答えさせるためには、現在の教育制度では十分でなく、鍼灸大学を初めとした教育体制の確立を計り推進して行く事が必要であろう。

これらのことがなされれば鍼灸師の社会的地位向上・信頼される鍼灸師ということにもつながって来るのではないだろうか。

保険問題については、卒後間もない鍼灸師が生計を立てて行く上で特に関心があり、日針会が行なった調査「保険取扱意志の有無について」では95.5%の者が取り扱う意志を示していた⁷⁾。一部には反対する意見もあるが、早期確立を望む声が多く鍼灸師・組織が団結して、団体の統一化を図り組織未加入者をなくし、共に保険問題に対応して行く必要がある。

学会の仕事は、鍼灸医学の発展を計ることが主務であるが、学術大会での業績をもとに鍼灸医学をさらに確立発展させ、鍼灸教育をさらに改善し国民の健康維持・増進のため、学会は大きな強い組織にならなければならないであろうと考えられる⁸⁾。又両会は、鍼灸の教育機関を通じて、両会の実態・活動状況を今以上に理解してもらい、入会の呼びかけをして行く必要がある。

卒後間もない鍼灸師は、西洋医学的知識と技能の向上及び現代医療との協力体制を望んでいる者が多い反面、古典の学習・鍼灸師の独自性を持つべきだという主張もかなりあった。しかし、現在の社会情勢から考えて、現代医学に協力・協調して行くことは不可欠なことではないだろうか。

以上、不十分な調査報告となったが、今回の反省の上に立って、今後もこの問題について考えて行きたい。

V 結 語

卒後間もない鍼灸師に対し、鍼灸学校卒業後の進路と実態調査を行い、日針会・学会に対する意識調査および鍼灸師のあり方についてアンケートを行なった。

卒後間もない鍼灸師は、日針会・学会ともに入

会率が低かった。また、日針会・学会に対しての意識調査も低かった。このことは、日針会および学会は今後、会務の実態、活動状況をより充実させ、鍼灸師の興味のあるものになっていく必要があると同時に、会員一人一人が両会を充実させ又両会は会員にメリットのあるものにしていく必要があると考えられる。

最後に、今回の調査に御指導・御助言を賜りました岡山大学医学部麻酔学教室の宮崎峰生先生、古谷先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 本田泰弘：鍼灸学校卒業後の進路と実態調査(Ⅰ)，全日本鍼灸学会雑誌，投稿中。
 - 2) 善徳泰博：国会におけるはり・きゅうに関する質疑応答。医道の日本日本，477, 122. (1984)
 - 3) 58年度会員異動状況：日本鍼灸新報，264, 9. (1984)
 - 4) 医学便覧：(社)全日本鍼灸学会，カネボー薬品KK，113. (1984)
 - 5) 黒須幸男：全日本鍼灸学会の今後の方向，鍼灸学会報，7, 4. (1982)
 - 6) 谷口健蔵：明治鍼灸大学の開学にあたって，日本鍼灸新報，252, 7. (1983)
 - 7) 山下 健：鍼灸の医療保険取扱いの現状報告，日本鍼灸新報，251, 7. (1983)
 - 8) 中村万喜男：学会・教育・医療保険は無縁ではない，日本鍼灸新報，12, 4. (1984)
- (〒700 岡山市春日町4-23)